

「物語内の現実、作品、語り ―「ハリー・ポッター」シリーズを中心に」と題し修士研究を行った。研究の問題意識においては、作り手は必然的に作品に対して「作者の死」の前提のうちにある、物語の断定というのは時間の経過によって異なるもので、作品は常に断定不可能性のもとに位置づけられているということを述べておく必要がある。

作品は作り手によってだけ成立するわけではなく、それぞれの受け手によって想像され作り上げられていく、異なる物語の世界が存在している。受け手にとっての世界が異なるのは、どこからそのように受け取っているのかすなわちどこから発生する語りによるものか、あるいは受け手がどのように構築して受け止めていることになっているかということであり、これは物語世界の再構築だけでなく、受け手自身を改めてどこに位置付けているかが原因だと考える。ここにおいて、はたして「作品」における作り手と受け手はどのような存在といえるのか、あるいは「作品」に対してどこにいるといえるのだろうか。「作品」はどこからどこまでを作品と見出すことができるかといえるのか、あるいはそもそもそれらの物語世界を区別することは可能なかといったところに問題意識がある。

作品において私達が認識できている「現実」は一側面でしかなく、その語り方・受け止め方によって物語世界の様相は異なることになる。本研究では、さまざまな幅を含む特徴的な「語り」を取り上げるなかで、送り手や受け手といった役割・境界が揺さぶられていくことにも着目する。そこで語られていることは、越境的な存在による意味の支配をなし崩しにするという抵抗あるいは戦いに他ならないものである。

検討の手順の一つ目に挙げているのは、なぜ私たちはフィクションという存在を「現実」の体験のように自らに取り入れ、受け入れるかについてであり、言語行為論の立場による先行研究を参照した。ウォルトンの理論への批判を中心に、生成された世界自体が自らによって構成されているにも関わらず、自分自身の貢献分だけを差し引くことなど本当に可能なかという疑問に続いていくことになる。本研究で着目したのは、それぞれによる独自のごっこ遊び世界、それらを集積した作品の最大領野のような総体群としての「ごっこ遊び世界」を作品そのものがもたらす「力」と考えるべきではないかということだ。

そこで推測される世界では主人公の存在に注目しなければならない。作品の展開をクロノジックな時間軸によって認識できる「物語内現実」と対比するかたちで、特定の作中人物にしか認識されていないと想定される現実を「物語内非現実（あるいは幻世界）」と仮定し、作品世界を検討することを試みた。それが本研究の問題意識に対する中心的な手法である。物語内の現実の多層性をみることで、主人公（作中人物）はどこにいるのか、語り手はどこから語っているのか、読者はどこから作用されてそのような物語世界を構築するに至ったのかということをも明らかにすることを目的としている。それはひいては作品内

外において、現実と非現実の認識をどのようにとらえているかという問いにもつながる。

手順の二つ目は小説内における語りの検討である。エドガー・アラン・ポーの短編、「黒猫」と「ウィリアム・ウィルソン」について取り上げた。「黒猫」では、語り手が詳細に語ることをあえて放棄している場面、語り手が「語り過ぎること」で読者が違和感を抱くことになる、という反対の手法が用いられている場面を確認した。「ウィリアム・ウィルソン」についても同様に、その語りは当時の主人公による認識なのか・未来時制の主人公による認識なのか・客観的な語り手による認識なのか、何を持って書かれているのかの判断を読者は断定付けることができないことを明らかにしている。

手順の三つめは映画における語りの検討である。『去年マリエンバートで』について取り上げたのは、鑑賞後の受け手がその物語世界から排除されたような感覚に着目している。そのなかにも一連のクロノロジックな時間による「物語内現実」をみいだすことができるのかというのが主な関心である。本作では終始「そこで語られていることは本当にいつかの過去として存在していたものだったのか」は明らかではない。それはクロノロジックな時間軸によって展開が「毎回同じ」（いわゆる起承転結が明らかなような）作品よりも語りの幅が拡大していくことになるといえるだろう。一貫した見方が出来ないからこそ後世に語り継がれ、何度も研究の俎上に挙げられ、別様の物語世界を提示することになっているということである。それはポーの小説による語りも同様の特徴をもっており、本来作品というものは作り手の手によって制作の段階で一旦の終わりを迎えることになるものの、筋道を明確にしないと作品は受け入れられることなく、見られることすらなくなってしまう可能性がある。しかしこれは返して言えば同時に物語世界の可能性が限定されてしまうということでもあるということではないだろうか。

最後の手順は「ハリー・ポッター」シリーズに関してである。このシリーズは本来児童文学というジャンルであるがゆえに一連の展開を認められるように思われるが、物語内非現実、すなわち現実世界のどこにその提示された事実を当てはめればいいのかわからない要素は映画にも小説においても描かれているということを確認した。それを検討することによって本当にクロノロジックな時間軸は安定していたのかと疑問に思ってしまうほどになるだろう。むしろその疑問にたつてこそ、読みの可能性は広がっていくことになると本研究では考えている。あるいは一過性の社会現象的なムーブメントに過ぎず、作品世界の息が長く残り続けられるかどうかといったことがそこからは読み取れるともいえるだろう。

終わりに、作品の語りによって「何度も生きる」ことが可能になるためには固定された読みが事前に限定されていることは危険だとし、それぞれの作品において自分はどこからそのように物語世界を理解するようになったのか、それはどこから語られているのか、なぜそのように思うに至るのかを自覚的に受け取るという態度について再度序章で触れたようなロラン・バルトやM・フーコーらを想起させるとともに、アダプテーション作品との向き合い方について述べ、本論を結んでいる。それは「自己を増殖させるあるいは手放す経験」をしていくことであり、もはや現実も非現実(虚構)も境界は存在しないものといえる

だろう。